

料金問題のもう一つとして、金額の問題がある。NACSIS-IR の料金は米国の利用者からは安いといわれるが、アジア諸国からだと高くて使えないといわれる。国内ではまあまあ結構な値段ですねくらいに言われる。特にアジア諸国を考えた場合、単に為替レートの問題ではなく、情報の値段をどう設定したらよいかは問題になるところである。

6. おわりに

以上、学術情報センターの紹介とその国際利用、国際利用の問題点について述べた。なお、学術情報センターのサービスについて詳細は <http://www.nacsis.ac.jp> を参照されたい。

プロアーチからの発言・質問

司会：長友 和彦

発言：土谷桃子（お茶の水女子大学・院）

土谷と申します。私は1994年から4年間、ニュージーランドの大学で日本語を教えて参りました。その大学、オタゴ大学と言うんですが、1993年、私が赴任する前の年から日本語科が始まったばかりで、ほんとに何もなくて全部一からスタートするという、本もない、人もいない、何もないところから始めました。

問題点は午前の先生方がおっしゃったように同じで、本がないですか、情報がこないということだったのですが、午後の今の皆様のご発表を聞いていたら、何か悩んでいたことが全て今日お話なさったことを知つていさえすれば解決したんじゃないかという、知らなくてほんとに残念無念という気がするんですが、現在でも海外で困っている先生方がいらしたら、今日の会議にでればよかつたのにと心より思います。

発表なさった先生方それぞれについて、ちょっと感想を述べさせていただきますと、最初に畠佐先生はコンピュータのお話で、まさに私もコンピュータに弱い方ですので、聞いていてとても勉強になりました。で、私が赴任していた大学でも、コンピュータ教材といいますか、コンピュータを沢山メディアラボのようにして導入していたんですが、やはりそれを使える先生がいないということと、あと、そのランゲージセンターを作ったのだから生身の先生の数を減らそうという、何か変な方向に話が進んでしまって、日本語科の人員も私が辞めたときにひとつ減って、そしてまた次の年にも一つ減ってということで、なにか、語学にそんなに明るくない方にはコンピュータを使えば先生がそんなにいなくてもできるんじゃないかというような、変な幻想があって、それでかえって私たちは困ったという記憶があります。

中村先生と佐々木先生のお話では雑誌の目録が非常に実は整理されていたのだということを知りました、ほんとにショックが大きかったです。私は四年間、向こうにおりましたが、大学が大変親切で一年に一回は日本に帰ることを許してくれまして、その度に国文学研究資料館に足を運んで、その一年にで

た新しい論文ですか新しくマイクロになったものですとか見させて頂いたので、ほんとに国文学研究資料館には感謝しています。それから寄贈本のことについて佐々木先生が、実際に奔走されたということがあったということで、このような運動が広まってくれればいいなあということを非常に強く思いました。

最後の宮澤先生のお話、学術情報センターでこんなにたくさんの情報を提供しているのか、と、これも知らなかつたということはまことに大きなショックでした。私が向こうで学術情報センターのホームページを使ったのは日本に帰った時に職はないかどうか、職の空きのページだけをひたすらよく見ていましたが、その外にこんなにいいページがあったなんてほんとショックで、これからでも使わせて頂きたいと思います。ほんとに今日は沢山いろいろな情報をありがとうございました。

問：畠佐一味（パデュー大学）

学術情報センターですが、先ほど研究者向けサービスのところの、学術誌の電子版を検索して本文が見られる、というサービスがありますよね、これは例えば我々、米国にいる人間が個人で、先ほど佐々木先生にきいたら『日本語教育』はその中に入っている」ということをおっしゃったんで、例えば『日本語教育』の1995年のだれだれのアーティクルがみたいという時にこれは見られるんですか。

答：宮澤彰（学術情報センター）

はい。まず一つ、現在の制度では個人でもってユーザ登録していただく必要があります。これが一番目。これが面倒くさくてこの難関を越えられないという方はかなりいます。実はWebのページで書き込めばできるようになっているんですけどね、それでも面倒くさい。実は私もやっていない。これはまあ、内部アカウントができるからですけども。それから1ページ印刷するごとにいくらといったような、これは著作権料です。これを学会員価といいます。学会によっては無料というところもあります。学会員だと無料だけど学会員以外だと有料というところもあります。これらは学会のポリシーで決まります。お金は学会に入ります。学術情報センターは一銭も頂いておりません。海外も同じです。

発言：中村康夫（国文学研究資料館）

ちょっとすみません、ご案内がございます。国文学研究資料館では毎年11月の中旬、「国際日本文学研究集会」というのをやっております。海外から講演にお呼びすることもありますし、留学しておられて研究された方が発表される場合もあります。年に一回公募制でありますて、応募された中から委員が選抜致します。そして選ばれた方がご発表になる、という形のものです。毎年一回11月の中頃です。一度ご参加いただければ要領がおわかりになるかと思います。また、コンピュータ方面に関心がおありの向きは、12月の最初の金曜日に「シンポジウム：コンピュータ国文学」というのを毎年やっております。これもシステム系に偏ったテーマになることもあれば、国文系に中心がいったようなテーマになることもありますれば、いろいろその年の企画によって違いますが、大体秋頃にはポスターなどでご案内がまわりますので是非、興味がおありでしたらご参加ください。以上でございます。

司会：長友和彦

何か他にございませんでしょうか。

問：石橋玲子（お茶の水女子大学・院）

国研の佐々木先生にお伺いしたいんですが、ホームページから国研のなかの様子は分かるんですが、そこから海外の日本語教育の状況がわかるかどうか。これは国際交流基金のほうになるかもしれないの

ですが、海外の日本語教育で何か話をしなければいけない時に、学習者数とか機関数等は分かるのですが、具体的にどういうことがなされているか情報を知りたいときに、国研でそういう情報を提供なさっている、あるいはリンクで検索できるようになっているのでしょうか。

答：佐々木倫子（国立国語研究所）

さきほど畠佐先生が、どこのホームページを見ても同じようなところがあるとおっしゃった部分があつたかと思うんですが、国研の場合も海外の学会のリストみたいなのは出ているんですね、ただ、そこにリンクするってのはできなかつたと思います。リンクできるものが一杯あるんですけども、確かにこれはリンクができないんじゃないかなあという気がします。ただ、リストは出ていますからそこからまた御自身でということが可能ですね。それから海外のことでしたらやはり基金の方のページをお開きになる方がよろしいかな、という気がします。ただし、コンピュータのよく分かる人によりますとリンクってのは割合、簡単に今できるから礼儀としては一応「リンクしましたよ」ってことは断るけれどもオープンになっているものはどんどんっていうこともあるようですから、もしかしたらできるかもしれません、すいません。年鑑に関しては、今年度、今進めてますのは基金の海外の7センターの方にその国の事情をまとめていただく。それを年鑑の原稿として頂きますので、印刷段階でも出しますし、或る程度の概要是ホームページの方でも御覧いただけるような形にもっていけると思います。以上です。

発言：畠佐

補足をしますと、リンク自体は多分団体の名前が分かれれば、それで検索すればその団体がページをもつていさえすればリンクを見つけることも簡単だし、そこへ国研の方から入るのも至つて簡単なことですけれども、今のご質問ですが、米国だったら Association Teachers of Japanese という団体のホームページもあって、その中に団体の活動の情報は入つてます。そこに米国での日本語教育の状況というような情報を彼らが入れているかというと、入つてないと思います。多分それは報告書的なものになるだろうと思うので、當時今のような情報が簡単なすぐ手に入る形で用意されているかというと、ちょっと無理なんじゃないかな、と思いますね。だから、ホームページではいって、その学会の本部の方にこのような情報を探しているんだけれども教えてほしいということを電子メールで送れば、向こうは対応はしてくれると思いますよ。

問：横川澄枝（お茶の水女子大学・院）

国研の佐々木先生に伺いたいんですが、昨日は話題に出てきたんですが、国研の年少者に対する日本語教育に関しての、日本国内における情報は国研の方ではいただけるんでしょうか。

答：佐々木

はい、それでしたらお任せください。というのも大袈裟ですけれども、私たち俗に子供部屋と呼んでいるところがありましてね、国内の外国人の子供に対する日本語教育関係の資料など集めて、また、その専門家がいる部屋が一つございます。ご利用いただけると思います。ただ、忙しいこともありますので、事前にご連絡はいただきたいと思いますけれども。

問：横川

実際に伺つてもいいということでしょうか。

答：佐々木

はい。実際に問い合わせいただいて構わないと…。私たちやはり連携ということをすごく大切に思って

ますのでね。どうぞ、ご利用いただけます。いわゆる子供部屋とかコミュニケーション部屋とか俗に呼んでる部屋の引越しですが、やっと完了したところところで、資料を移すところまではいってないかと思いますけれども、かなり情報はお出しできるという気はいたします。7月24日に「日系ブラジル人のバイリンガリズム」というシンポジウムというのを開きます際に、シンポジウム会場の後ろの方に、日本国内の学校教育の中で外国人のお子さんのために開発された自主制作教材など展示して、自由にご覧いただく予定になります。

司会：長友

他に何かございましたらどうぞ。

発言：田渕句美子（国文学研究資料館）

国文学研究資料館の田渕と申します。特に質問ということではなく感想めいたことですが、中村先生は研究情報部という所に属していらっしゃいますが、私は整理閲覧部という、収集したものを皆さんに公開するということを仕事にしています。ですけれども私は、資料館に着任したのは昨年の4月ですので、それまでは約20年ぐらい利用者でした。そういう点からちょっと、二、三申し上げたいなと思って手を挙げたということです。

国文研データベースの中でやはり使いがいのあるものというのは、中村先生がさつきおっしゃた、まずその文献目録論文データベースだと思いますね。その利用料金というのは私の経験では、まあ適当に、必要な時に使って大体、一ヶ月数百円ぐらいのものでしたので、ほんとにたいしたことではない値段になります。この論文目録というのは、近い将来、無料化の方向で進んでいて、無料になりました時はホームページに載せて皆さんに利用していただけるということになっておりますので、海外の方も、今現在は通貨の問題があつて利用していただけなくとも、一、二年後には利用できるという可能性がありますので、どうぞホームページの方を気をつけて御覧になっていただければ、と思います。

それから古典文学大系の方は、今すぐにでもホームページで、IDはいるんですけども、無料で見ていただけるんですね。もう一つその海外にいらっしゃる日本研究、もしくはその日本資料の研究をされている方に使いがいがあると私が思いますのは、国書総目録のデータベースで、これは国書総目録とその続編の古典籍総合目録を合わせました、統合の国書総目録なんですね、データベースです。これは今、試験的にホームページに載せていて、その所在情報は載っていない試験的な公開なんですけれども、ただ外国にいて、例えば、なんだかわからない古典籍、和古書があつて、題名はわかるけれども何だかわからない、日本にあるかもわからないとき、そのデータベースというのはどの字からでも引けますので、それで簡単にひいていただけることがあります。これも将来は、所在情報をつけて、それから国文研が所蔵しているマイクロ資料目録をそれにドッキングさせて、そのデータベースを開けば或る本の、これは国文研のマイクロに、これはどこぞの図書館にあるというふうに所在情報をつけた形で公開できるように努力しています。あと何年か後には公開できるように努力しているというところです。

先ほど学術情報センターのお話など、私、聞いていて、大変勉強させていただいたんですが、私自身もコンピュータにあまり強くないものですから、乗り越える何過程も幾つかあります、まずインターネットにつながなきやならない、それからIDナンバーを取得しなければいけない。でも、外国の方は更にいろいろな障壁があるということで、私は情報を提供する立場なんですかけれども、そういう意味で

研究者の先生方からの、こういうところに困難があるとか、こういうものが必要だとかそういうふうな情報というのはものすごく有益で、今日もほんとにこのようなシンポジウムを企画していただいて出席させていただいたというのは、私だけではないと思いますけれども、本当に有益な経験であったというふうに思っています。ほんとに感想だけなんすけれども…。どうもありがとうございました。

問：長友

学術情報センターは、海外から使用する場合の支払い方法としてクレジットカードは利用できるんですか。

答：宮澤

出来ません。(会場笑)

問：長友

ちょっと具体的にお願いします。

答：宮澤

現在可能な方法としましては、一つが円で振り込んで頂くことです。これは不可能ではございません。やれないわけではない。だって我々ドルで払うことがあるんですよね。だけど向こうから円で払えないってのは何故だと思います？ それからですね、ドルでデポジットしていただきます。デポジットするための機関が国内に設けてあります、そこに例えば10万円デポジットしておくと、ドルでいくらかデポジットしておくと、対応した日本円の分だけ使ったらそこでシステムがとまってしまうと、そういうようなシステムがございます。今のところはそれしかできません。後は大蔵省に言ってください。

発言：長友

かなり大きなネックだという気がしますね。

発言：畠佐

確かにそうだと思うんです。どうしてもっとユーザフレンドリーなシステムにならないのか、外にいる人間にしてみたら非常に苛々の種だと思うんです。我々ははじめに反応します。我々の頭としては、なんかティファニーに行ってガラスのなかにこんなに素晴らしい指輪があるんですよ、あなたいくらですか。二百万円です、買えないでしょって言われているような気がする。非常に矛盾しているような感じがします。

問：長友

大蔵省といわず、何とか一致団結して解決できないかという気がしますけれど…。どうでしょうかね。

答：宮澤

このことは、ほんとに、我々、頭痛の種で、この十年以上、随分悩んできたことの一つです。先ほど申しましたように根本原因は日本の国家の会計制度の、現金を見るまでは現物を出してはならんという、売り掛けというものがないという、これが会計法でそうなっているんだそうでして、その法律から改めないと、ほんとかなあと思うんですが、と、いわれております。要は説明の問題なんですね。情報というものを物として売ったからいけないんです。物としてじゃなくて、別の売り方というんでしょか。別のことについてお金だという、役的な理屈なんですね。あるいは法律的な理屈かもしれません。そういうものになります。これについては我々もいろいろ随分、努力はして、いまだに解決して

おりません。もしかすると、その独立行政法人化というのが、我々望んでるわけではないんですが、それの解決に繋がるかもしれません。ただし今のところなんとも言えません。えー、役的な答弁ですね。結局はそういう役的な世界の話なわけです。

司会：長友

なにか少し暗い感じが…。(笑) さっきは非常に明るい光が見えたような気がしたんですが…。今、おっしゃったのは、デポジットをすればいいってことですが。特に何か今のことに関連して…。

発言：井村哲郎（新潟大学）

今の問題は実はもう一つ別の要因がありまして、勿論、日本の予算制度に絡むんですけれども、為替レートの変動が絡んでくるんですね。例えば今日の1ドルが112円であったとして、最近はそう極端ではありませんけれど、翌日に1ドルが120円になったとすると、ドルだけ料金を決めておいた場合には、お金が増える場合でも減る場合でも日本の予算制度では問題になる。1枚単価いくらっていうふうに決めておいても実はだめだという、そういう問題が絡みます。それからもう一つ、これは使ってる側の方から言いますと、外貨を買うためには手数料がかかるわけですね。そうしますと、例えばアメリカから日本になんて円で払えないんだということを先ほどおっしゃいましたけれども、利用するサイドからいいますと、外貨の交換手数料がそれだけONされるんで、えらくあわない話になる。デポジットは確かに一つのやり方だと思いますけども、それにしてもやっぱり手数料はかかるわけで、これは世界単一通貨にでもならない限りちょっと解決不可能な問題ではないかと思います。

司会：長友

やはり、ユーザーからするとどうしても、納得できない部分が残るんじゃないかなという気がしますけれどね。税金払っているのに、どうしてユーザーに便利にできないんだろうと思うのですが…。では、あと、もうひとつ。

問：方美英（お茶の水女子大学・院）

今までのとはぜんぜん違って、基本的なことをちょっとお伺いしたいんですけども、先ほど学術情報センターの方が発表された部分で韓国との相互利用機関というものがあるとおっしゃったんですけども、具体的にはどういう機関なのかということと、そこでもし日本史研究とか、そういうものをしていく所であれば、その資料を見られるかどうか、それをちょっと伺いたいんですが。

答：宮澤

相互利用ではありません。学術情報センターの情報検索の利用をしている機関が韓国で二つ登録されています。一つが漢陽（ハンニヤン）大学校。一つがソウル国立大学校です。ちなみに一月に数回使われているようですが、雑誌記事索引とか学位論文データベース、研究者ディレクトリ、ジャパンマックなどを引いておられます。